

平安文人の仏教信仰

——貞観・寛平期の文人達——

平安時代の文化活動一般において、文人と称される一群の知識人的中下級貴族が常に中心的位置を占めるとともに、貴族社会における浄土教の発達の先駆的な役割を担ったことについてはずでに周知の通りである。

先回の報告（本誌三五卷一号）では、貞観元慶期に活躍し、「当代之詩匠」と称され、菅原道真の義父でもある島田忠臣の仏教信仰その他思想面での特質について、主に私家集「田氏家集」を材料に検討し、次の諸点を指摘した。仏教の面では、西方浄土への強い関心が認められるだけではなく、すでに願生思想をも抱いていたと考えられること、加えて老荘玄学の影響、自らの属する官人社会に対する嘆きもしくは批判、更には閑居隠逸の生活への思慕など、願生思想の前提としての厭離穢土に通じる厭世的、現世否定的な性向のうかがわれることなどである。

九世紀貴族社会における弥陀信仰は、故人の追善供養が一

般的と考えられる中で忠臣の場合はむしろ異例に属するといふべきであろう。文人忠臣が他にさきがけるようにして願生思想を抱くにいたった直接の契機として、今回は中唐の詩人白居易の影響について考えることにしたい。

白居易の時代唐土ではすでに浄土教はその全盛期を過ぎようとしていたが、白自身は特にその後半生において浄土教に深く傾倒した。彼の詩集「白氏文集」は承和期に渡来し、以後わが国漢詩文に圧倒的な影響を与えた。忠臣自身が白に深く傾倒私淑したことはいうまでもない。

忠臣の思想的特質としてさきに上げた諸点は、実はいずれも白居易に通じるものでもある。白の、「官」を望ましくないものと考え、身「吏」にあるとも心は「隠」にあるといういわゆる「吏隠」の考え方は、そのまま官人社会への批判、諷諭、閑居脱俗の思いという形で受けとめられている。

忠臣の浄土への関心ないしは信仰が、白居易を通して触発

中 尾 正 己

されあるいは深められたということも、彼の白の処世、思想に対する私淑共鳴を見ればごく自然なこととして受けとめられるのではなからうか。偶然ではあろうが、「白氏文集」「田氏家集」のいずれにも西方幀をめぐって浄土欣求の心情を述べた作品が見られる。

忠臣の浄土願生思想はかくして多分に白居易の直接的影響のもとに形成されたと考えることができるのであるが、もしそうであるとするならば、文人島田忠臣の正に文人としての本来の営為活動の中から浄土信仰が把みとられたということになり、注目される点であると考えられる。このことは、平安浄土教の發達の歴史において、文人階層が先導的役割を果した事情について一の解答ないしは暗示を与えるものと考えられるからである。

九世紀から十世紀にかけて政治社会の様相は大きく変質し、摂関専制への道が強力に推進された。文人社会にあっては、それは文人間の激しい葛藤、そして門閥の形成、さらに文章経国思想の退化などとなってあらわれた。この文人階層にとつての悲観的な状況が彼等の間に厭離穢土的な浄土信仰を興起させるにいたる客観的条件であつたことは改めて論ずるまでもない。

文人達をとりまくこれら客観的な状況の変化に加えて、もともと彼等の本業である漢詩文の道そのものの中に、彼等文

人をして浄土信仰に親近感を持たせ、その受容を容易ならしめる要因の存在していたことをここでは特に指摘しておきたい。

忠臣とほぼ時期をひとしくする他の代表的文人達の白居易受容と浄土信仰についてひとわり捉えておくことにしたい。忠臣にやや先んずる都良香は、わが国で最も早く白居易の影響を受けた一人であるといわれるが、その「白楽天讃」は白の持つほほあゆる側面を見事に網羅して理解の深さを示すとともに（諷諭の面のみ欠けるといわれる）、中でも「身世界に住むと雖も、心は虚無に遊ぶ」と述べ、白の吏隠的特質が適確に捉えられている。

良香と同時代の菅原是善（道真の実父）も白に傾倒する風が顯著であり、その伝には「天性事少く、世体忘るるが如し、常に風月を賞して吟詩を楽しむ、最も仏道を崇め人物を仁愛す」（三代実録）とあって世俗に超然とした風格を強調する所がある。同じく同時代の大江音人については後代の史料であるが、「臨終に精爽として乱れず、言語常の如し、西方に向つて合掌し、仏頂尊勝陀羅尼を七返誦して氣絶す」（扶桑略記）と、西方浄土信仰を抱いていたことが伝えられている。

以上の三人が活躍した時期は、白居易の「白氏文集」のわが国渡来から短日月を経たのみであるが、彼等の精神生活のあり方を見ると、浄土信仰については確証はないものの、す

で白のそれに倣おうとする主観的傾向はかなり明確に認められるように思う。平安朝のわが文人間に君臨した白居易の影響は早い時期から始まっていたわけである。

以上の文人達よりも更に先輩にあたる春澄善繩になると、白居易の影響は明らかではないものの、一方で著しい老荘玄学への傾倒が見られる。老荘の隠逸思想は、中国では六朝および初唐に流行したもので、わが国では平安初期にかけての文章道の興隆と漢詩文隆盛の風潮の中で次第に文人間に浸透を深め、「経国集」以下の三勅撰集でも田園隠逸趣味などの形でしばしば詠まれるようになった。このような漢詩文の伝統が、平安漢詩文の底流として流れ、文人達の思想的営為を通して彼等の思想を培ったその意味は、決して無視出来ないものがあるかと考えられる。

忠臣にやや遅れて元慶寛平期に活躍し、菅原道真からも詩人として高く評価された紀長谷雄の文学的活動は正に白居易の直接的影響の下にあり、必ずしも現存の作品が豊富ではない中で、閑居隠逸を詠じた詩作の多く見出される点など注目にあたいし、又菅原道真も詩作において白居易の影響を受けた点で代表的であるとともに、その思想の面においても老荘的隠逸趣味、浄土教への傾斜など白および忠臣に多く通じるものがある。

右にしばしば触れた閑居隠逸の思想とは、あくまでも文学

的趣味ないしは隠遁生活への単なる思慕にとどまるのが一般であり、実際に官を辞し俗塵を離れるものの数少ないことはいうまでもないが、彼等の文学活動の中でこのような觀念が常に醗酵され続け、文学的思想的伝統として定着するに至る時、文人達をとりまく客観的状況の中で、単なる趣味以上の現実的な意味をおびることもありえないことではない。しかも彼らの間で圧倒的な影響力を持つ白居易によって「吏隠」なる処世のあり方が示されてみれば尚更のことであろう。

以上見てきたように、特に「白氏文集」渡来を一つの画期としてその直接的影響と、その後の彼等を取りまく社会的条件の変質の中で、文人達の間に確実に一つの精神的な潮流の形作られつつあったことを認めることが出来る。このやや誇張して言えば現世内的価値に対する否定ないしは懷疑への傾斜の中で、同じ白居易の影響の下に浄土信仰は彼等の関心の集まる所となり、一つの信仰としての位置を築き始めることになるのである。

なおいうまでもないことであるが、九世紀から十世紀始めの文人達の浄土信仰は多くの思想、信仰が混在する中で一つの信仰にとどまるものであり、それは忠臣として同様であった。特に明確な願生思想という点では、信仰以前の単なる知識、関心にすぎなかった場合も多かったことと思われる。

いずれにしても、文人における浄土信仰（ないしは関心）は、

多分に文章道そのものの中から胚胎したという面をここでは重視しておきたい。そもそも文章経国思想は平安初期嵯峨朝盛んに鼓吹されたものであるが、理念的にはとも角、現実的には内に矛盾を含むものであった。唯美的な宮廷詩賦の創作が経国的な意義を担うものと認識されて疑われなかったのは、律令制の破綻がいまだ深刻化していなかった嵯峨朝なればこそであり、以後律令制衰退の中でより現実的な意味をおびた経世の業と、一方花鳥風月や人生の感情を托する風流の道は、特に後者の純粹化が進む中で両者の結合が単なる建前に堕し風化するとは不可避であったといつてよい。

前述のように漢詩文そのものの中で老荘的田園隠逸趣味がうたわれ、特に「白氏文集」渡来以来、その影響のもとに吏隠の思想、浄土信仰などが文人間に受容されていく中で本来文章経国思想に含まれていた矛盾は一層あらわとならざるをえない。

いわば九世紀から十世紀にかけての文人間の浄土信仰は、律令制崩壊にともなう時代的必然としての文章経国思想の退化と、更に言うならば「文章」と「経国」の亀裂の過程で胚胎したということも出来よう。

この問題は文人階層の二派の対立にもつながる。その一方の派——経世の実務家的文人——を代表するものとして三善清行の名が上げられる。彼は本稿で縷々述べて来たいわゆる文人

階層の思想的風潮からはほとんど無縁であったといつてよい。

一方九世紀末宮廷社会では詩人無用論が叫ばれ、そのいわゆる詩人派と目され自負してもいたのが菅原道真を始めとして島田忠臣、紀長谷雄らであり、いずれも文章道の伝統に立ちなによりも白居易を以て手本と仰ぐところに共通点を見出しうる。浄土信仰をも内包した一種の現世的価値の相対化に通じる人生観、社会観をもつ点で彼等いわゆる「詩人」は共通している点でも注目される。

浄土信仰が文人達の本来の業である漢詩文そのものの中から胚胎したことはすでにくり返し述べた通りであるが、その漢詩文の道とは、右のような文人をとりまくさまざまな状況の変化、特に文人社会における軋轢——実務派と詩人派——の中で、実務派からの、あるいは藤原氏を始めとする権力者からの圧迫と、文章経国思想の退化の中で、詩人派文人達がその伝統を守ることに賭けた文章の道そのものであったのである。

参考文献（抄）

- 金子彦二郎 平安時代文学と白氏文集
小原 仁 文人貴族の系譜
後藤 昭雄 文人相軽（日本文学 昭和四十八年九月号所収）
ハキワードV 文人、願生思想、白居易

（跡見学園女子大学講師）